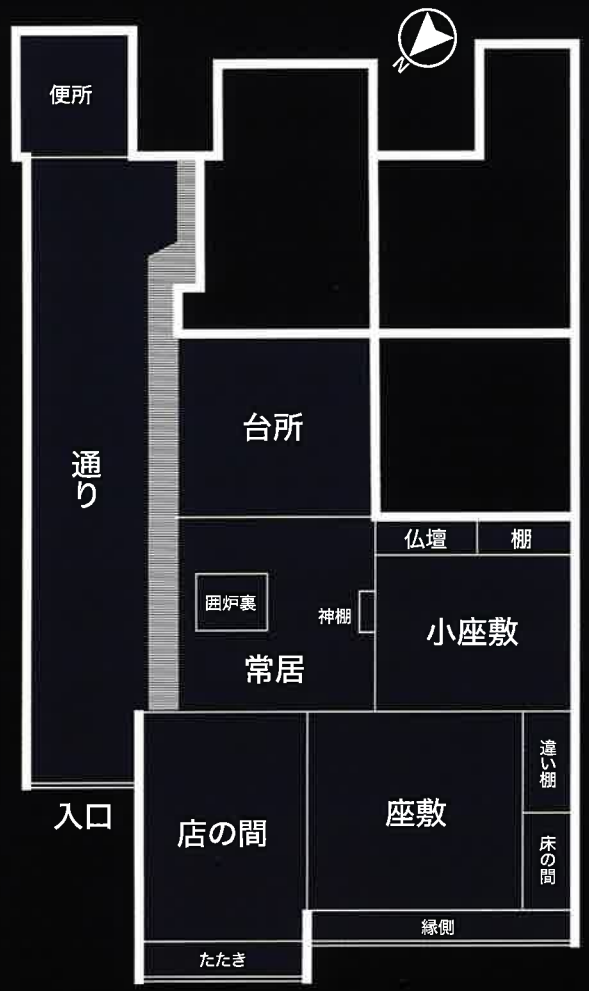
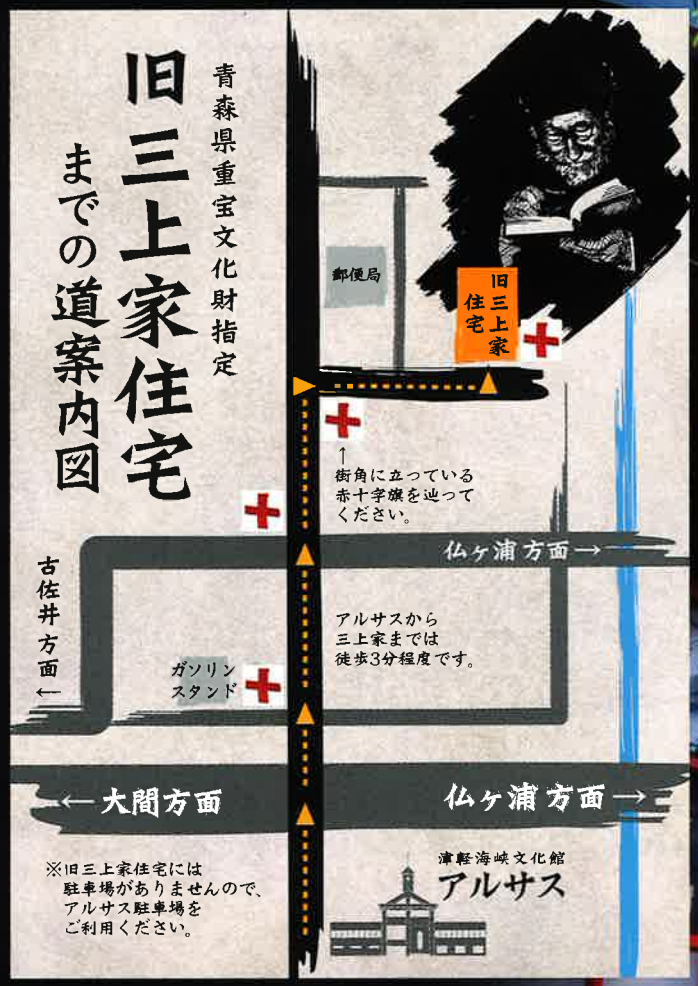
建物の特徴

旧三上家住宅の門をくぐると最初に見えるのが、引き戸が朱色に塗られた「店の間」と「たたき」の部分です。患者は「たたき」で履き物を脱いで「店の間」にあがり、ここで待ちました。その隣の「座敷」は、床の間や違い棚がある書院造りとなっており、ここで診察や処置を受けました。「店の間」の奥の「常居」は今で言う「居間」で、神棚や囲炉裏があります。「店の間」の左側の「入口」が三上家の玄関であり、家の人間はここから出入りをしました。「入口」を入ると「通り」と呼ばれる造りで、まっすぐ裏庭に抜けられるようになっています。そして仏間や寝室が家の中ほどにあり、一番奥に水回りがあるのがわかります。このような間取りは昔の村ではごく一般的であり、多くの家が同様の造りであったようです。





開館時間／午前9時～午後3時　休業期間／11月～4月

佐井村へのアクセス

- **高速船**…青森市からシイライン㈱の高速船で2時間30分
- **フェリー**…函館市から大間町まで90分（大間町から佐井村まではバスなどを利用）
- **鉄道**…青森市からむつ市まで約2時間（むつ市から佐井村まではバスなどを利用）
- **バス**…むつ市から下北交通㈱のバスで約2時間

佐井村教育委員会

〒039-4711 青森県下北郡佐井村字糠森20
TEL 0175-38-4506　FAX 0175-38-4512

旧三上家住宅

青森県県重宝指定

佐井村

江戸期から受け継がれた地域医療の系譜

旧三上家住宅は、代々医師の家系として佐井村の地域医療に貢献してきた三上家の住宅であり、およそ300年間に渡り医師を輩出してきたほか、全国的にも貴重な和風医院の特徴を残す建造物として評価され、平成28年4月に青森県県重宝に指定されました。

初代・三上平助が佐井村へ住んだのは1688年（元禄元年）ですが、1718年（享保3年）に二代目・庸達が川内村（現・むつ市川内町）の御町医・菊池俊安に弟子入りしたことが、三上家の医師としての系統の始まりでした。庸達はその後京都へ上り小松大学のもとで医学を修得しました。これを期に、三上家の子息は医師の修行のため京都や江戸へ向かうことが慣例となり、医学の名門と讃えられた山脇一族（京都）や、『解体新書』を刊行した杉田玄白（江戸）、勝海舟の主治医であった金沢良斉（江戸）など、日本でも有数の名医に師事し、そこで学んだ近代医学を佐井村へ持ち帰りました。

※写真はレントゲン装置の一部です。

レントゲン

昭和10年に島津製作所から購入したレントゲン。非常に高価な機器だったので、所有財産の山の樹木を売って購入しました。

洗眼器

中に消毒液を入れて眼を洗うもの。伝染性慢性結膜炎（トラコーマ）の治療に使用されました。

人力車

三上家が所有した人力車。剛太郎が帰村した大正4年以降、車夫を雇って往診に回りました。

勝海舟の書

7代目・子恵が江戸の金沢良斉のもとで修行していた縁で、勝海舟の主治医であった良斉を通じて書を貰い受けました。

蓑虫山人の書

蓑虫山人は明治12年に来村し、三上家に逗留しました。

三上家八代目

三上剛太郎と赤十字

1869年（明治2年）、三上家の八代目として生まれた剛太郎は、15歳で東京に出て、三田英学校（現・錦城学園高等学校）へ入学し、23歳で読売新聞の記者となりましたが、25歳の時に父が亡くなったことをきっかけに、東京医学専門学校・済生学舎（現・日本医科大学の前身）へ入学。医術開業試験に合格後、佐井村へ戻り医業を引き継ぎました。その頃佐井村では、ジフテリアや結核が流行しており、その撲滅のため剛太郎は北里伝染病研究所へ入学するなどして研究を続けていましたが、明治37年2月に日露戦争が開戦し、剛太郎も軍医として従軍することになりました。

1905年（明治38年）1月、満州・黒溝台における戦いのさなか、剛太郎軍医の包帯所がロシア・コサック騎兵に包囲されました。その時剛太郎は、手元にあった三角巾2枚を縫い合わせて正方形とし、それに軍用の赤ゲット（毛布）を切り裂き、十字に縫い付けて赤十字旗を作り掲げたところ、騎兵は包囲を解いて立ち去り、数十名の負傷兵が救われました。

それから約60年後の1963年（昭和38年）、スイス・ジュネーブで開催された赤十字100周年記念国際博覧会にて、負傷兵を救った名誉ある「手縫いの赤十字旗」として紹介され、世界の人々の感動を呼びました。

終戦後、佐井村へ戻った剛太郎は、人力車や小型ボートで巡回診療も行い、村の保健衛生を担いました。剛太郎は多岐に渡る功績が讃えられ、昭和35年に保健衛生功労者として青森県褒章を、昭和37年には佐井村名誉村民第1号を贈られました。94歳でこの世を去った剛太郎が残した「手縫いの赤十字旗」は、その仁愛の精神を示すものとして今も大切に保管されています。